

作る→使う→直す、 をひと回り回してみる

完璧な仕様書は、要らない



前回のおさらい — たった4つのループ

①言語化



②つくる



③使う



④直す



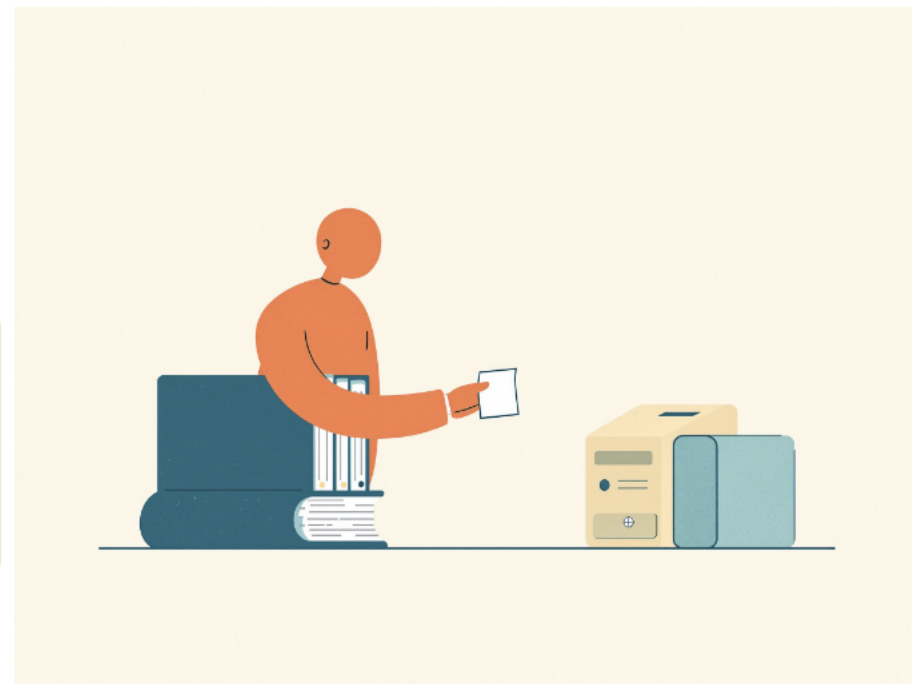
今日は、②③④を一気に回す



完璧な仕様書は、要らない

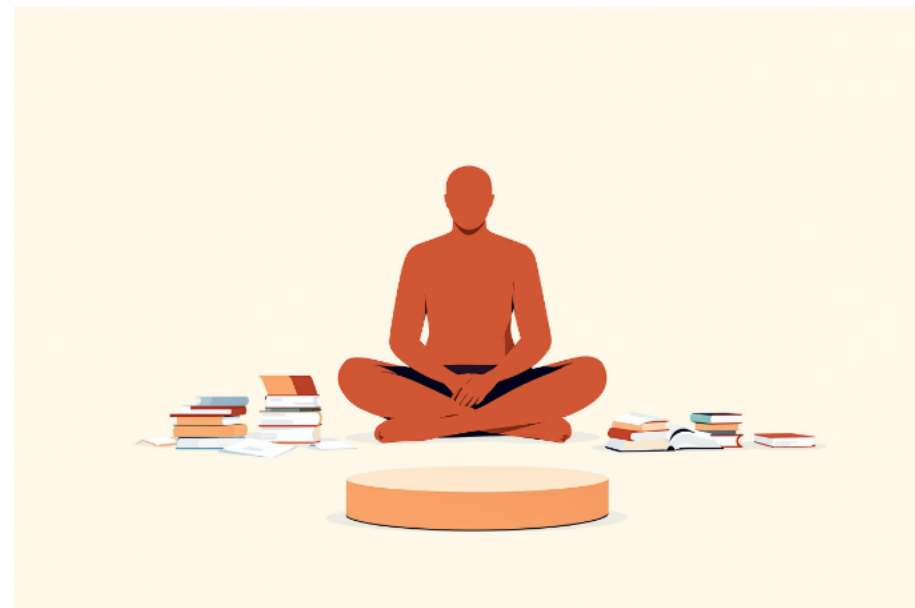
現状・問題点・解決したいことだけ伝えて、
「どう解決するか」はAIに考えてもらえばいい。

解決策の中身まで、人が事細かに決める必要はない。



「勉強したのに、 何も作っていない」が一番多い

知識だけが増えて、手を動かした経験がゼロのまま。
これが「勉強したはずなのに実感がわからない」の正体。

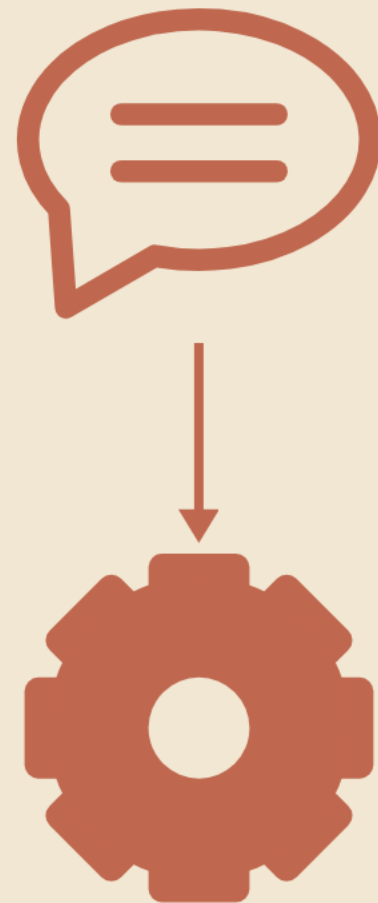


2

つくる

自分専用の 「楽ちんツール」を作ってみる

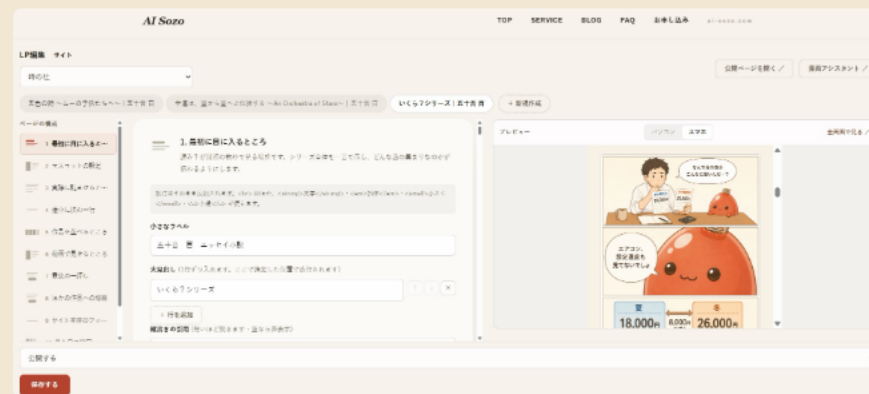
毎週の転記作業を代わりにやってくれるだけの、
自分専用の小さなツールで十分。
目的だけ伝えて、完成形は指定しない。



3 使う

触ってみると、
机の上では見えなかったものが見える

これは私自身が作った「楽ちんツール」の実例。
ランディングページを編集していて、
触ってみて初めて「ここが惜しい」に気づいた。



ランディングページ編集ダッシュボード



4 直す

惜しいところを、
また言葉にして直す

気づいた「惜しい」を、そのままAIに伝える。「ここはこうしてほしい」
「この動きが思っていたのと違う」。感じたことをそのまま言葉にすれば
十分。

さっきのダッシュボード、直しているうちに生まれたのがこの機能。



漫画アシスタント機能



回した数だけ、 AIとの距離が縮まっていく

作って終わりではない。使う→直す→また使う、を何周か回してみる。
何をどう伝えれば、狙った形に近づくか。これは説明を読んでわかるものではなく、
実際に何周かループを回して、初めて身につく。

回した数だけ、AIとの距離が縮まる。



AIの出力を読む速さが、そのまま成果になる

知っている分野

- ・ 視野を広く、輪郭だけをつかむ
- ・ 要点は数行に収まっている
- ・ 斜め読みで十分ついていける

知らない分野

- ・ 普段よりゆっくり丁寧に読む
- ・ 単語が素通りしやすい
- ・ 必要なら裏取りをする



貯めるべきは、成功談ではなく失敗談

成功談

ネットに落ちている

AIもすでに学習済み。わざわざ自分が貯める必要はない。

失敗談

誰も発信しない

「この方法を試したが、ここで詰まった」は、AIがどこからも学習できていない、あなただけの資産になる。



AIに任せること VS 人が手放さないこと

AIに任せる

- 解決策の設計から動くものを作ること
- 直すこと、手を動かす部分すべて

人が手放さない

- 「作ってもらう」を実際に起こすこと
- 使ってみて感じたことを言葉にすること



作る→使う→直すを、 一度回せるようになったら

次は仕事の話です。

第5回「クライアントワークへの応用」では、
お客様の声を自分ごとにする方法を扱います。

無料AIユーザーレベルチェック →

ai-sozo.com/tools/ai-user-level

